

まねして、大人口づから吹きたまへといふ、盜何の思慮もなく、力を入れて吹くに及びて、其機を測り、忽ち盜の烟草を握り、躍り掛りて、方に任せて咽喉を突く、盜不意を討れて、大に狼狽して、仰けに倒れぬ、警婦直に我が縊袍を摸取し、虎口を遁れて、兼ねて知れる村家に投宿し、右の狀を話す、翌朝村人堤上に來て見るに、盜遂に一烟管の爲に、急所を突れて死せりと云ふ、七尺の大男子、一警婦に斃さる、又天ならずや、武州忍の在なる、吉次郎といふ者の話なり、 遞庵主人記

〔烟草百首頭書〕烟管のつよく結たるには、鹽湯か味噌汁にて通す時は、悉流る、也、少しつまりたるには、吸口より大指と人さし指にて五寸程ばかりて、駈と押して吸つくれば、よく通なり、これは呪なるべし、

〔昆陽漫錄〕寬字銀

同書唐に云く、鐵葉皮紙皆以爲錢と、今のきせるのがんくびの古きを、錢へ雜ふるも、この類なり、

〔鷲峯文集百十一〕荳蔻管銘

竹柄銅管、合爲一筒、上曲下直、外長内通、呼吸之息、淡烟之風、攪睡伴寂、閑味參同、

烟草入

〔麓の花下〕たばこ袋

たばこの世に専らはやりて、中頃よりは、みづから持て人の家にいたりても、又は野邊などにも持行て、くゆらす事にはなりにたり、さればたばこといふものを、ものなくてはかなはぬゆへに、初はかみにつゝ、みてもたり、そは元和寛永の頃か、とよ、今こゝに出せる圖をもて、そのさまを去るべし、さてそれより袋にいれたり、ゆへにたばこ袋といへり、そは次にいだせるあやめ鏡の繪をもて、そのおもむきを去るべし、略 〇圖

〔好色二代男五〕四々七分の玉もいたづらに